

グループ紹介

大学名	芝浦工業大学
グループ名	さいたまオアシスプロジェクト
発表テーマ	東京オリンピック・パラリンピック開催時の雪の利用促進について
指導教員	増田 幸宏 (システム理工学部 環境システム学科 教授)

参加学生

氏名 (ふりがな)	学部・学年	氏名 (ふりがな)	学部・学年
【代表者】 水野 眞子 (みずの まこ)	システム理工学部 4年	加藤 拓朗 (かとう たくろう)	システム理工学部 4年
荒井 敦哉 (あらい あつや)	システム理工学部 4年	竹井 敦志 (たけい あつし)	システム理工学部 4年
新井 健 (あらい けん)	システム理工学部 4年	塚本 啓之 (つかもと ひろゆき)	システム理工学部 4年
石崎 将貴 (いしざき まさき)	システム理工学部 4年	()	学部 年
()	学部 年	()	学部 年
()	学部 年	()	学部 年

検討・提案について (アピールポイント、反省点、所感など)

スノーパックに関しては、これまでに行われた複数の実証実験で、多くの利用者が効果を実感し、好感を持っている様子が見受けられた。本提案を契機に、スノーパック事業における諸問題の解決に向けた議論がさらに進んでいくことを期待する。

雪テントに関しては、商用電源の有無を問わず、屋外の様々な場所に設置し冷房空間を創出することができるという強みを生かした提案を行った。この強みを生かし、熱中症患者用の救護空間を設けたテントを、あらかじめ熱中症の発症リスクの高さが懸念される場所や、冷房空間へのアクセスが良くない場所に設置することで、より多くの人命を救うことにつながるのではないかと考える。

今回の雪事業は、東京オリンピック・パラリンピック(以下東京 2020 大会)での活用を想定し、埼玉スタジアム周辺・さいたまスーパーアリーナ周辺を対象地として選定したが、本提案を機に他会場での実施や、東京 2020 大会以降の雪事業の継続を願う。

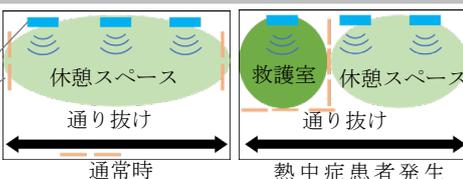
政策提案概要書

東京オリンピック・パラリンピック開催時の雪の利用促進について

提案の背景

さいたま市では来年開催される東京 2020 大会に向け、熱中症リスク低減のために東日本連携都市である南魚沼市と共に、雪を用いた熱中症対策を実施している。対策として雪を袋に詰めたスノーパックの配布と雪を冷熱源として利用するテントの設置を実施している。芝浦工業大学は大会会場に指定されている埼玉スタジアム 2002 とさいたまスーパーアリーナで行われた事業の実証実験に参加し、計測をした後、効果の確認及び問題点の洗い出しを行った。そこで見つかった問題点を改善し、雪事業の活性化を進め、東京 2020 大会開催時の熱中症リスクの低減を目指すプロジェクトを開始した。

提案概要

スノーパック	<p>問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・パックのポイ捨て増加 ・ごみ分別の誤り ・プラスチックごみ排出量の増加 <p>解決策</p> <p>① 投票式ごみ箱の設置</p> <p>ごみを捨てながら投票できるごみ箱を設置する。パック専用のごみ箱を設置することでポイ捨てを減らすことが期待できる。また、投票テーマをスポーツやさいたま市の政策案に結びつけることでごみ箱に捨てることへの動機付けを図ることができると考えられる。</p> <p>② ペットボトルの活用</p> <p>空のペットボトルに雪を積み既存のスノーパックと併用を行う。この方式は、既存の形式でのスノーパック事業に比べ、ごみの排出量とポイ捨ての減少が期待できる。</p>	 <p>投票式ごみ箱イメージ</p> <p>高齢化対応 循環型社会推進 子育て支援 これからのさいたま市に必要なことは??</p>
雪テント	<p>問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・熱中症患者受け入れ態勢の未整備 ・通り抜けのみの利用 ・テント内温度の偏り <p>解決策</p> <p>テント内部は通り抜けスペースと休憩スペースを設ける。冷却効果の高い送風機側に休憩スペースを配置する。軽量ベンチとパーテーションを置き、状況に応じて柔軟に配置を変更できる空間とし、救護患者が発生した場合は、救護室を確保する。また、パーテーションにポスターを掲示し、南魚沼市やさいたま市の PR 効果を図る他、熱中症についての解説を載せ、効果的な熱中症対策の啓発も行う。</p>	 <p>送風機 休憩スペース 通り抜け パーテーション 救護室 休憩スペース 通常時 熱中症患者発生</p>  <p>通常時イメージ</p>  <p>熱中症患者発生時イメージ</p>